Japanese Association for Religious Studies

を意味し、宗教調査のなかに神社に対する調査が含まれていることから分かるように、②神社を宗教と分離する観念が、宗教的現場においては依然として明確なものではなかったことを意味する。

一方、前述の「宗教規則」によって可能となった日本仏教による朝鮮寺院の管理という事態は、世俗権力とはっきり区分される近代的な「宗教」固有の領域に限定されえない複合的な領域にあった朝鮮の寺院を、朝鮮王朝との関係を切り離し、近代的な宗教の領域に一旦は限定させる役割を果すものであったと理解すべきであり、また、儒教の領域においては、近代教育制度としての「学校」という概念に基づき、郷校の宗教性を否定する宗教領域の再編成が行われることとなった。

一九一〇年前後の植民地朝鮮と「内地」において曖昧なものとして連関していた帝国日本の宗教概念は、「類似宗教」という概念を生み出したり、神社参拝拒否の動きを引き起こしたりするものの根幹にある問題でもあったが、植民地権力による統制とその下での競争という事態のなかで、国民精神を啓発、統合する機能を担う、あるいはそれに役立つ存在といった概念がそこで付与され、ポストコロニアルの現在にまで存在し続けているのである。

渡瀬常吉の朝鮮伝道における論理
――その初期伝道活動を中心に――

裵　貴得

本報告は、日本組合教会の朝鮮伝道の問題を日本と朝鮮という二項対立的な眼差しではなく、一九一〇年当時西欧宣教師と対立して独立した崔重珍の「自由教会」を取り上げつつ、日本、朝鮮、西欧の相互関係の中で捉えなおす試みである。

一九一一年朝鮮伝道を開始した日本組合教会の渡瀬常吉は、当初京城と平壌を中心に伝道活動を行っていたものの、なかなか増えない信者数に悩んでいた。そのなか、一九一〇年反宣教師を提唱する自由派と偶然に出会うこととなる。自由派とは、一九一〇年南長老教の全羅北道代理会地域で、反宣教師的・反教権的教会を主唱し、長老教から分派して自治教会を設立した崔重珍の「自由教会」のことである。その後、崔重珍の自由教会は、同じ年に長老教から独立した平安道の車学淵、一九一五年アメリカの宣教師と後継者の問題をめぐって対立し、メソジスト系統の大韓基督教を脱退した忠清南道の申明均にも影響を及ぼしている。反宣教師を以って独立した車学淵と申明均の独立教会は夫々、一九一二年と一九一六年組合教会に加入することとなる。その後、渡瀬の朝鮮伝道はこの自由派の「自由教会」に支えられながら、信者と教会を伸ばしていくこととなる。

ところで、アメリカ宣教師と対立して独立した崔重珍の「自

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

由教会」の背景には、一夫多妻（蓄妾）と祭祀の問題に対する朝鮮側と宣教師側の異なる認識が生じていた。蓄妾と祭祀の問題を偶像崇拝と悪弊として打破すべき対象として捉えていた宣教師たちは、両者を諦めない朝鮮の教徒たちには教会に通うことは許可しても、洗礼を受ける資格は与えられないという強硬な姿勢を示した。一方、朝鮮の牧師として現場の教徒たちが蓄妾と祭祀の問題で教会から離れていく現状を目の当たりにしていた崔は、蓄妾と祭祀に対する規律を緩和させることで、多くの朝鮮の教徒たちに洗礼の資格を与えるよう主張した。つまり、蓄妾と祭祀をその背景とする崔重珍の「自由教会」は、単なる反宣教師的教会ではなかったのである。それは当時朝鮮に伝播されたキリスト教を伝播する側と受け容れる側の相互作用の中で形成されていく一過程であった。というのは、崔と宣教師の間で蓄妾と祭祀をめぐって繰り広げられる論争は、キリスト教的価値観と教理すなわち、新しい宗教概念に対する朝鮮側の反応であったのである。その反応は、宣教師側のキリスト教的価値観と教理に「同化」しながらも、それらをくつがえす朝鮮側の「抵抗」と「創造」によって繰り返し展開されていく。かかる朝鮮側の予期せぬ「抵抗」と「創造」は宣教師側の朝鮮宣教における政策の変更を余儀なくさせたのである。

日本組合教会の場合も、自由教会との出会いによって、個人への伝道を中心としていた宣教政策から伝道旅行を通した教会中心の伝道政策に変更したのである。そして、自由教会の組合教会への加入を切っ掛けに、朝鮮における伝道の可能性を確信した渡瀬は、朝鮮教化を担うのは日本組合教会しかできないという論理を展開させていく。さらに、「朝鮮民族の教化が多くの外国人」によってなされていることを懸念しつつ、日本に併合された朝鮮民族を教化するのは日本人の手で行うべきであり、それこそが真の併合であることを主張する。かかる渡瀬の朝鮮伝道における論理は、その後組合教会に限った問題ではなく、日本の国民運動として展開させていく。

崔南善と「朝鮮の固有信仰」

沈　熙　燦

本報告は、植民地朝鮮を代表する知識人である六堂崔南善の朝鮮史研究や宗教認識を取り上げて、「宗教的普遍性」の追究を通じて、帝国日本の支配言説に抵抗しようとした崔の論理が、ファシズムに転回していく過程をえぐりだそうとするものである。そのような転向の原因に焦点が当てられていた既存の研究では、崔の議論における「誤認」「錯視」などが豹変という「致命的な結果」をもたらしたと主張されたり、もしくは支配秩序を転覆するための「高度の戦略」であったと評価されてきた。しかし、帝国日本との拮抗関係のなかで生成されていった崔の論理的な曲芸の通底には、「宗教的普遍性」への渇望が一貫しており、であるからこそファシズムの論理に擦りこまれていくことができたのではないかと思われる。

皮肉にも、自らが弛まず主張したように、崔は転向、あるいは豹変したことがなく、つねに朝鮮を中心とする「宗教」を立

NII-Electronic Library Service